

## 大津市堂における「里地里山」利用

吉田 麻美子・横田 岳人・宮浦 富保

### 1. はじめに

里地里山は、様々な人間の働きかけを通じて環境が形成されてきた地域である（環境省 2002）。その景観には、薪炭林・農用林などの二次林、茅場などの草原、畑、水田、あぜ、水路、ため池などが含まれる。この景観は、人と自然との関わり合いの歴史を反映する文化景観である。1950年代後半、石油・ガスなどの化石燃料が普及し、農業でも化学肥料が一般化すると、里山はその利用価値を失い、放置されるようになった。里地里山の重要性は、1990年代後半から再認識されるようになり、現在では保全に向けての様々な取り組みが日本各地で行われるようになった。ただ、農業を始めとする社会環境の変化が著しく、里山環境の保全ではなく里山環境の復元や創出に近い取り組みもなされている。保全・再生・復元・創出の取り組みは、里山に手を入れる活動が中心となっており、歴史的景観に配慮することは少なく、里山活動の多くは画一的である。画一的になる背景には、地域の山である里山の保全に地域外の人々が携わって行われたり、ステレオタイプの里山観が反映され、必ずしも地域特性や歴史を踏まえた里山活動が行えていないことがあると思われる。

龍谷大学瀬田キャンパス隣接地の通称「龍谷の森」も、都市近郊の里山林として里山保全活動が行われているが、文化的景観である里地里山を保全し再生するには、その地域の歴史的背景を認識しておくことが重要であると思われる。

瀬田丘陵周辺地域での里地里山の土地利用についてまとめた報告は見られないが、人々の暮らしや自然の恵みの利用などは、地域の自然や民俗歴史を記した地誌の中にその一端を見ることが出来る。この地域では「月輪栗林史」（月輪栗林史編纂委員会 1981）や「昔を今、語りつぐわがまち瀬田東」（瀬田東学区郷土誌会編集委員会

1998)、「南大萱史」(南大萱史編さん室 2004)、「月輪史」(月輪史編纂委員会 2006)等の地誌が発刊され、また「田上の民俗」(田村 1972)や「上田上の生活体験談集成」(上田上村誕生百周年記念事業実行委員会 1990)の形で民俗調査結果が残されているが、「龍谷の森」周辺の里山利用については、十分にまとめられていない状態である。里地里山の利用実態については、他地域では杣の会が高島郡朽木村針畑(現高島市朽木)で模式図として分かりやすくまとめており(杣の会 1990)、このような図化が他地域でも必要と思われる。

今回、「龍谷の森」に南接する大津市堂で聞き取り調査を行い、「龍谷の森」を含めた瀬田丘陵の里地里山利用について1950年頃の様子を図表として書き留めた。里地里山利用の歴史の一断面を記録に残すことで、この地域の今後の里山保全や里山再生を考える一助にしたいと思う。

## 2. 調査地の概要及び調査方法

### 2.1 調査地の概要

調査地として、滋賀県大津市堂を選んだ。堂は、大津市の南東部にある田上地区に位置する。田上地区は、東南に田上山、西北に瀬田丘陵、北東には金勝山の連山と、琵琶湖から流れる出る瀬田川とに囲まれた盆地である。田上山を源流とする大戸川は、田上盆地の中央部を蛇行しながら瀬田川に合流する。大戸川支流の宮川を境に東側を上田上、西側を下田上と呼んでいる。2007年1月現在、堂の人口は91世帯271人(男子131人、女子140人)である。農業は39軒が行い、全て兼業農家である。水田面積は27haで、年間95トン程度の収穫が得られている。

この地域一帯の歴史的背景を概観する。田上地区一帯は、上代から朝廷の御料地として保護されていたため、山には杉や檜の自然林が生い茂る豊かな土地であり、大戸川からは常に清く豊かな水が流れていたと伝えられている。また、古来より奈良、大津、京都と信楽、草津を結ぶ要路であり、多くの人々の往来によって文化交流の盛んな土地でもあった。しかし、藤原宮造営に田上山が着目され、相次ぐ宮廷や東大寺や石山寺といった寺社の建立のために大伐採が開始された。江戸時代には、花崗岩質の山肌がむき出しとなって風化し、大雨が降るたびに多量の土砂を流し、大戸川の川底を浅くしていった。このために、毎年のように大洪水となり、堤防は決壊し、田畑は冠水・洲入り・埋

没するなどして大被害をもたらした。当時、ほとんどの住民が大戸川沿いの集落で暮らしていたが、これらの水害を免れるために高台に移住することを余儀なくされた。堂でも、1802年（享和2年）の水害により、3戸を残し流出したために、現在の高台（瀬田丘陵の裾）に移転した。

## 2.2 調査方法

本研究では、里地里山の利用方法を農作業の面から把握するために、仕事暦を通して里地里山の時間的な利用実態を表現した。また、空間的な利用実態を図形式でまとめることとした。調査対象年代は、里地里山の利用が盛んであった1950年代までと、現在（2007年）とした。

堂の里地里山の利用実態を把握するために、現地での聞き取り調査を行った。現地での聞き取り調査には、次の5名の方に協力をいただいた。前田藤美さん（1918年生）、南部絹枝さん（1917年生）の2名は現在80歳代後半で、家を支える重要な女手として、戦時中は男性の代わりに一家を支える大黒柱となって家を守った方々である。また、南部正敏さん、南部義彦さん、谷本眞澄さんの3名は1941年生まれ66歳の男性で、戦後まもない頃に子供時代を過ごし、その後の日本の高度成長期を支えた世代である。

聞き取り取材は2007年10月～2008年1月の間に行った。取材は1回につき1時間半～2時間程度とし、80歳代後半の女性2人は2回取材を行った。この聞き取り取材で得た情報を元に、仕事暦と利用形態図を作製した。

## 3. 1950年代の里地里山利用

図1は現地での調査結果を元に、1950年代の天津市堂における里地里山の空間的な利用実態を図式化したものである。人々の住居となるイエ（家）のすぐ近くには、日々の食の要であるハタケ（畑）があり、その先に重要な現金収入源となるタンボ（水田）とそのアゼ（畔）がある。イエの裏には、食料を生む場所と同時に災害から身を守るための堤防でもあるドテ・ヤブ（土手・竹藪）があり、その向こうにはカワ（川）がある。少し離れば、日々の生活に欠かせない燃料をとりに行くヤマ（山）がある。堂では、このような景色が日々の暮らしを支えていた。

1950年代の天津市堂における里地里山の時間的な利用を、仕事暦として図2に示し

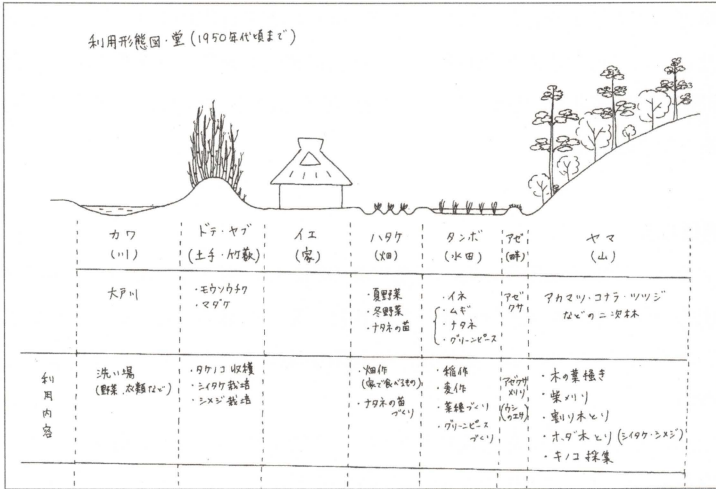


図1 利用形態図・堂 (1950年代頃まで)

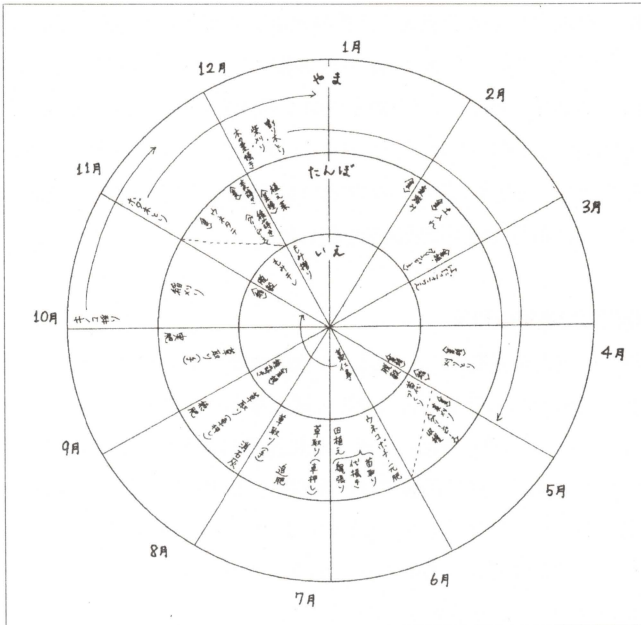


図2 仕事暦・堂 (1950年代頃まで)

た。堂の一年間の仕事の中で、一番大切な仕事は稲作であった。稲作の時期である春から秋の間は、陽が昇る前から陽が落ちるまでタンボで過ごしたという。また、裏作の時期である冬の間は、毎日ヤマに燃料採取にいった。イエでの作業といえば、稲や麦の脱穀や、もみ干し、もみ摺り、夜なべの藁仕事などほんの一部だったようだ。

以下、空間的な利用形態（図1）を軸にして、1950年代の堂の生活の様子を季節を巡りながら（図2）まとめてみる。

### (1) イエ（家）

イエ（家）の敷地内には、人が暮らす住居スペース以外に、ウマヤ（牛屋）、コヤ（作業小屋）、カド（庭）、モン（門）などがあり、それぞれの場所を使い分けていた。図3はイエ（家）の敷地内の位置関係の一例であり、図4は就居スペースである母屋の間取りの一例である。イエでは、稲や麦の脱穀、もみ干し、もみ摺り、夜なべの藁仕事などの農作業も行われていた。

#### モン（門） 保存スペース

イエ（家）の敷地内の入口にはモン（門）と呼ばれる建物がある。入口の両脇には焚き付けに使うコノハなどを保存しておく部屋があり、ここに一年分のコノハを蓄えた。家によっては二階建てになっていたり、作業小屋とひと続きになっていたり、様々な形があったようだ。大きい家では雇い人を住まわせる部屋にもなったという。

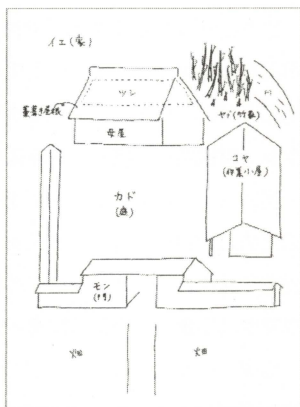


図3. イエ（家）敷地内の位置関係

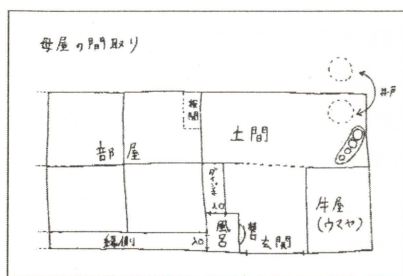


図4. 母屋の間取り

### カド（庭） 作業・乾燥スペース

モンをくぐった先には、カドと呼ばれる広い庭があった。ここでは、ムシロを広げてモミを干したり、ウシのエサになるアゼクサを干したり、屋根のあるところにワリキやシバを干して積んでおくなど、主に乾燥させる場所として利用した。干している最中に夕立が降ると、どこにいても形振り構わず慌ててイエに帰ったという。もみ播りは石臼で行った。6～10月頃には、カイブシ（蚊取り線香のようなもの）を焚いて夜なべで藁仕事をした。作るのは草履などであった。

### コヤ・ナヤ（作業小屋・物置小屋・納屋） 作業・収納スペース

コヤと呼ばれる作業小屋では、脱穀などの室内での農作業をしたり、農作業に必要な用具を置く場所として利用していた。脱穀は足踏み脱穀機を用いた。大きな作業小屋の他に、コノハやウシのエサにするアゼクサを蓄える小屋や納屋などがある家もあった。

### ツシ（屋根裏） 収納・保存スペース

当時の母屋は藁葺き屋根であったため、それを葺く材料になる麦藁を葺き替えのときのために大量に確保しておく必要があった。そのため、ツシと呼ばれる屋根裏の部分に麦藁を保存していた。ここに燃料などを置くこともあったという。

### ウマヤ（牛舎） ウシの飼育・タイヒの生産

母屋に入るとすぐ右側にはウマヤと呼ばれる牛舎があった。当時の農作業にウシは重要な存在だった。タンボを耕す労働力になるだけでなく、麦藁をウマヤに敷いて、ウシの糞尿を染み込ませたタイヒはタンボの肥やしになった。

## (2) ドテ・ヤブ（土手・竹藪）

当時、どこの家でもヤブ（竹藪）があり、タケノコの収穫、シイタケやシメジの栽培が行われた。タケノコの収穫は、モウソウチクが4月中旬から4月末まで、マダケが5月下旬から6月上旬に行われた。シイタケ栽培は、3月中旬から4月下旬に収穫できるものと、9月上旬から10月下旬に収穫できるものがある。シメジ栽培では、山でのキノコ採りの時期と同じ10月上旬から11月まで収穫した。また、シイタケとシメジの菌打ちは、12月上旬に行った。

大戸川に沿った家では、川の土手が竹林になっているために、家の裏がヤブになっていた。

### (3) カワ (川・河原)

大戸川では、畑でとった野菜を洗ったり、お盆の時期にはふとん布を洗ったりした。また、子どもたちの遊び場でもあり、採った魚が食卓にのることもあったようだ。

### (4) ハタケ (畠・畑)

イエ (家) の傍にはハタケがあり、ここでは季節の野菜が作られていた。8月末頃に菜種 (ナタネ) の苗が植えられ、12月の初めにタンポに移植 (植え菜) された。その他の季節は、家で食べるための野菜を作るために利用していた。タンポでの仕事から帰ってくるついでに、その日食べる分の野菜を収穫し、近くの川で土を落としてから家に持って帰ったという。

### (5) タンポ (水田)

堂のタンポでは稲作と、その裏作である麦作、菜種づくり、グリーンピースづくりの二毛作が行われていた。麦は時代によって、小麦、大麦、ビール麦など様々なものを扱った。収穫した後の麦藁は、屋根を葺く材料や草履を作るために保存、利用された。菜種は菜種油にして売り、その搾りかすは肥料として利用した。グリーンピースは近くに工場が出来たために作るようになったという。

## 稲

稲作は5月の苗代づくりから始まる。タンポの一面に種を蒔き、6月下旬の田植えまでここで育てる。5月に麦刈りとグリーンピースの収穫が終わると、ウネを崩して平らにするイネコボチ (またはダイコボチ) をして、稲作に備える。このときに元肥 (モトゴ工) も一緒に入れる。次に、水入れをした後、代掻きをする。代掻きでは、水を入れたタンポを耕して土を柔らかく水平にする。次に縄張りをする。これは田植えのとき7本の苗が植わる幅に、事前に縄を張る作業である。田植えは、苗を痛めないように後ろに下がりながら苗を植え、同時に自分の足跡も消して平らにしていかなければならない。そのため、まっすぐ後ろに下がりながら植えられるように、縄を張る。7本というのは、一人が植えられる横幅の目安になっている。縄張りが終わるといよいよ苗取り、田植えとなる。苗取りでは、苗床から苗をとり、田植えのときに苗を植えやすいように束にして田植えに備える。田植えでは、苗の成長を揃えるため、いっぺんに植えてしまわなけ

ればならない。そこで、結（ゆい）と呼ばれる助け合いのグループを作って、田植えをした。ここまでが6月の仕事である。

7、8月の夏の暑い頃になると、草取りが主な仕事となる。草取りは、車押しと呼ばれる歯車の付いた手動の草取り機で行う草取り作業と、手で行う草取りがセットになっている。一回目の車押しは7月上旬、稲を弱らせないように、稲の根がタンポについた後で行う。歯車の歯が稲の周りの土を搔いて草を土に混ぜ込み、同時に横に張りすぎた稲の根を切る。この2週間ほど後、車押しで取り損ねて成長した草を、手で取って土の中に埋める作業を行う。その後また生えてきた草を、8月の中旬に車押しで除草し、取りきれずに成長した草を9月の中旬に手で取った。暑い時期の草取り作業は、とても苦しい作業だったという。

7月の中旬には、草取りの合間に肥料を入れる。これは田植えから20日ほど後に入れる追肥（オイゴエ）と呼ばれる肥料である。肥料は、酒かす、豆の搾りかす、油かす（菜種の絞りかす）、米ぬか、たい肥（ウマヤに糞を敷いて糞尿を染み込ませたもの）を使った。入れる肥料の配合などは、時期や作物の状態によって変えていたという。8月上旬にはタンポに消石灰を入れた。タンポの土質を酸性からアルカリ性にし、稲の成長を助ける。8月下旬には穂肥（ホゴエ）を入れる。これは、穂が出る20日ほど前に入れる肥料である。稲作の最後に入れる肥料は実肥（ミゴエ）で、穂が出揃ったあと（穂ぞろい期）に入れる肥料である。

図2の仕事暦を見ると、草取りと肥料やりが交互に行われているのがわかる。これは、稲にやるための肥料が雑草に取られないようにするため、必ず草取りをした後に肥料を入れていたのだという。

実肥まで入れ終わると、時期を待って稲刈りとなる。稲刈りは10月の中旬から行われる。作業は、稲を手鎌で刈り取り、運びやすい大きさに束ねて家に運ぶ。その日のうちに家まで運び込めないものは、二オ（穂先を内側にして丸く積んだもの）にして夜露に濡れないようにしておく。家に運び込んだ稲は、脱穀し、もみ干した後、もみ摺りして出荷となる。タンポが家から遠い家では脱穀もタンポで行った。稲刈りが終わったタンポでは、裏作に備えるため、ウネタテが行われる。これは土の高低差（ウネ）を作る作業である。



## 麦、菜種、グリーンピース

裏作のなかで最初に取り掛かるのが麦である。麦は、11月の下旬に麦蒔き（種蒔き）をする。その後、2月に入って麦踏みと土いれ（土よせ、土かけ）をする。麦踏みでは、伸びすぎを防ぎ根張りをよくするために麦を踏み、土入れでは麦に土をかぶせる。これらが終わると、次は5月の麦刈りとなる。

グリーンピースは麦蒔きの後種を蒔く。菜種は8月末～9月初めに種を蒔き、12月上旬に植え菜（タンポに移植）する。その後3月上旬に、はだこさらえを行う。はだこさらえは、作物の植わっているウネに対して溝になっている部分（はだこ）の土を、草の生えている方を下に向けて、ウネの部分（作物の根元）にかぶせる作業である。グリーンピースと菜種のはだこさらえは同時期に行われる。菜種は4月中旬に刈りとり、脱穀する。グリーンピースは、5月に入ってから収穫が行われる。

菜種、麦、グリーンピースの収穫がそれぞれ終わると、裏作が終わり、タンポは稲作の準備へと入っていく。

## (6) アゼ（畦・畔）

タンポに沿うアゼでは、5月～11月の間、アゼクサ刈りが行われた。刈った草は乾燥させて保存しておき一年分のウシのエサにした。広いタンポのアゼの草を刈って一周する頃には、最初に刈った場所はまだ草が生えていたという。この仕事は、忙しいタンポの仕事の合間を縫って行われた。これは、草取りと合わせて、夏の苦しい仕事であった。

## (7) ヤマ（山）

裏作の麦、菜種、グリーンピースの種蒔きと植え付けが終わった後の12月から4月は、“山行き”の季節になる。これは、山からコノハ（木の葉）やしバ（柴）、ワリキ（割り木）をとってくる作業で、冬の間はほとんど毎日山に通ったという。これらの作業で、冬の間一年分の利用量をとっておき、乾燥させてイエ（家）に保存していた。コノハと呼ばれるのは松葉であり、その落ち葉を掻いて集める作業を“木の葉掻き”と呼んだ。しバ（柴）は低木の落葉樹（コバノミツバツツジなど）のことで、これを刈り取る作業を“柴刈り”と呼んだ。ワリキ（割り木）とは、直径が20cmほどの落葉広葉樹（クヌギ、コナラなど）を30cmほどの長さに伐り、縦に割ったものである。これを山から伐

ってくる作業を“割り木とり”という。家に持ち帰ったコノハとシバは焚き付けとして、ワリキは燃料として用いる。

コノハやワリキは、モンヤツシなどイエの決まった場所に年間の使用量を保存していた。そこで保存場所の大きさから、ヤマから採取したコノハやワリキの量が推定できる。1世帯（5人家族）のワリキの保存スペースの1年間の変化量は $1.73\text{m}^3$  ( $3.6 \times 1.2 \times 0.4\text{m}$ )、コノハの保存スペースは $8.75\text{m}^3$  ( $1.8 \times 2.7 \times 1.8\text{m}$ )である。保存スペースに積み上げた隙間をワリキで0.3、コノハで0.5とし、木材比重をそれぞれ $0.4\text{g}/\text{cm}^3$ 、炭素換算係数を0.5として木質重量を炭素重量に換算した。その結果、1世帯あたり1年間の利用量は、ワリキで $0.24\text{tonC}$ 、コノハで $0.87\text{tonC}$ と推定された。現在の「龍谷の森」のコナラ林は1ha当たり1年間に落葉量が $2.30\text{tonC}$ 、成長量が $4.59\text{tonC}$ と推定されている（南 2008）。コノハについては1haで3世帯が養われる程度の利用がなされていたと推察される。また、1ha分の成長量は19世帯分のワリキ使用量に相当すると考えられる。ただし、森林の生産力が60年前と同様と考えるのには無理があるし、利用量自体の推定も仮定が多く実用的ではないことをお断りしておく。

10月～11月中旬にはキノコ採りも行われる。採ったキノコは、マツタケ、シメジ、クロコ、イクチと呼ばれるキノコであった。山が解禁されると、他人の山でもキノコが採れるようになるので、持ち山がある人はそれまでに採りに行き、持ち山がない人は解禁後に採りに行った。シイタケ栽培やシメジ栽培のホダ木は、11～12月の間に山から伐り出し、菌打ちして竹藪に置いておく。シイタケのホダ木に使うのはクヌギやナラであり、シメジにはカキを用いた。

#### 4. 現在（2007年）の里地里山利用

現在（2007年）の天津市における民家周辺（1950年代頃まで里地里山として利用されていた場所）の空間的な利用実態を図式化したものを図5に示す。また図6には、現在（2007年）の民家周辺における時間的な利用を仕事暦として示した。イエ（家）からウシはいなくなり、母屋は瓦屋根となり、タンポ（水田）での営農方法も変化した。ヤマ（山）はほとんど利用されなくなった。1950年代頃までの人々の暮らしを支えていた風景は、約60年の間に変化し、人々の生活から遠く離れたものになっている。

空間的な利用形態（図5）と時間的な利用形態（図6）の点から、1950年代からの変

化を中心にまとめてみる。

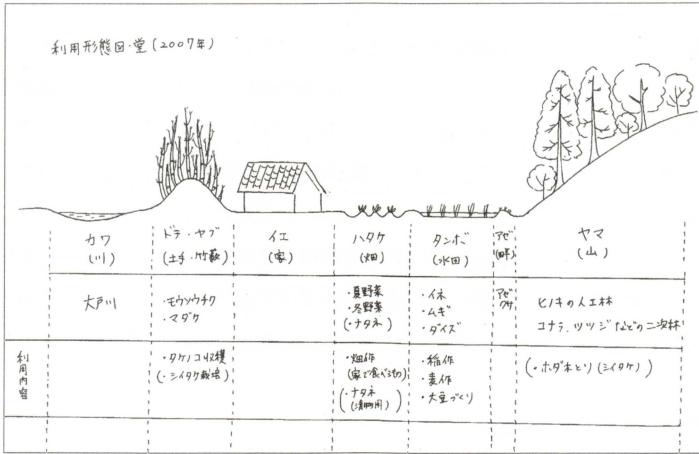


図5. 利用形態図・堂 (2007年)

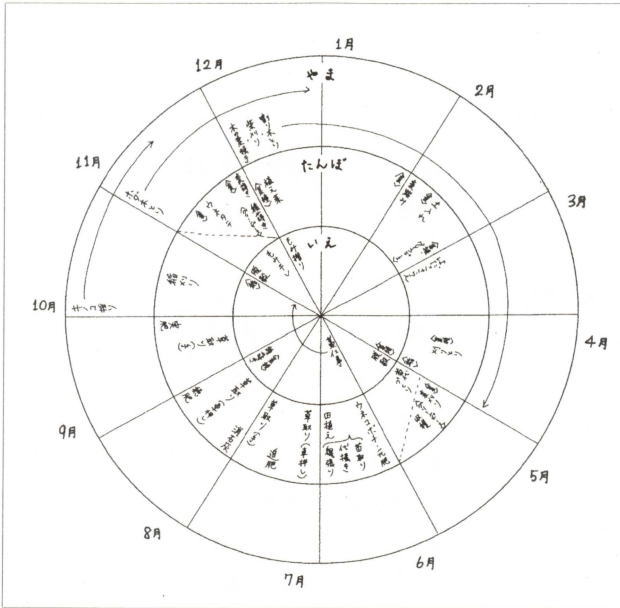


図6. 仕事暦・堂 (2007年)

### (1) イエ (家)

農地の労働力として耕運機が入ってきたことで、ウシがいなくなり、母屋からはウマヤ (牛屋) がなくなった。乾燥機が導入され、広いカド (庭) は必要なくなり、木が植えられたり、池が作られたりした。そして、藁葺き屋根の家は、維持に手間がかかるためにそのほとんどが瓦屋根の家に建て替えられた。コヤ (作業小屋)、モン (門) も違う用途で使われたり、壊されたりしている。藁葺き屋根の母屋、カド (庭)、コヤ (作業小屋)、モン (門) がすべてそろって残っている家は、現在3戸ほどしかない。

農作業の点でも大きく変化し、現在でも脱穀機・乾燥機・もみ摺り機などを持っている家はその作業を機械で行うが、その他の家はすべて農協に頼んで作業してもらい、家での農作業は全くなくなった。また、藁仕事も生活様式の変化に伴いなくなった。

### (2) ドテ・ヤブ (土手・竹藪)

ヤブ (竹藪) では、現在でもタケノコの収穫は行われており、シイタケ栽培も一部で行われているが、シメジの栽培は行われなくなった。タケノコとシイタケの収穫の時期に変化は無い。

### (3) カワ (川・河原)

現在でも、ハタケでとった野菜を洗うことはあるようだが、護岸工事によって以前より川に近づきにくくなった場所もある。

### (4) ハタケ (畠・畑)

ここでは現在でも季節の野菜が作られ、食卓に並んでいる。また、一部の家ではハタケで菜種を育て、菜の花漬けという漬物を作っている。

### (5) タンボ (水田) 稲・大豆／大麦

現在のタンボでは、稲、大豆とその裏作の大麦を作っている。この3つの作物は輪作になっていて、大豆を作ったタンボでは、次の年稲作をし、その次の年は麦作をする、というように同じタンボでも毎年育てる作物が変わるようになってきている。

## 稲

現在の堂での稲作は、輪作をするタンポとしないタンポがある。輪作をしないタンポは、10月下旬には土改良資材の散布を行い、11月下旬には畝たてをして、次の年の稲作に備える。連作のタンポでは、11月に大豆の収穫が終わった後、12月中旬に耕起作業を行い、2月の中旬に畝たて作業を行う。4月の耕耘作業から収穫作業まではどちらのタンポも同じ工程をたどることになる。4月下旬の耕耘作業でタンポを耕し、5月の中旬に代掻き、下旬には田植え作業となる。田植え時には同時に元肥も散布される。6月中旬には、除草剤を散布し、7月上旬にはイモチ防除を行う。その後7月下旬に穂肥を散布し、9月上旬には収穫作業となる。収穫作業までが終わると機械の清掃作業が行われる。

## 大麦

現在の麦作は、10月の中旬に苦土石灰散布を行い、10月の下旬に片培土、排水作業で麦作のための状態を整え、種子消毒も行う。11月上旬には、大麦の播種と排水培土、排水作業、除草剤の散布を行う。その後、冬の間の作業は無く、4月下旬と5月中旬に赤カビ防除を行い、6月上旬に収穫を迎える。

## 大豆

大豆は、6月初旬の麦の収穫後、6月中旬に土壌改良剤を散布する。この土壌改良剤とは、土壌診断の結果を踏まえて配合された肥料である。7月上旬には、種子消毒、播種作業、排水作業、除草剤散布を行う。播種作業とは、機械を用いて種を蒔く作業のことで、この前に種子消毒を行い、播種作業と同時に排水作業、除草剤散布を行う。7月下旬と8月中旬には、中耕培土を行う。中耕培土とは、根元に土を被せ、通気性を良くし、根粒の付きを良くし、生育を促す。また土を被せるので除草効果もある。8月下旬と9月下旬には、防除作業を行い、10月中旬には畔草刈りを一斉に行う。そして11月下旬に、収穫作業となる。

## (6) アゼ (畦・畔)

アゼ(畔)では、タンポの状態を保つために、5月から11月の間に5回の畔草刈りが行われるが、ウシのエサとしての利用は無くなった。

## (7) ヤマ (山)

コノハ・シバ・ワリキの代わりにガスの利用が普及したことで、冬の間の“山行き”の作業は必要なくなり、山にはほとんど足を踏み入れなくなった。また、山を利用しなくなったことで山の価値がほとんどなくなったために、ヒノキを植林したり、山を手放したり、そのまま放置した。そのため、山では遷移が進み、アカマツの多い明るい林だったのが、コナラなどの広葉樹の多い林になった。

盛んに行われていたキノコ採りも、植生が変わったり、スーパーなどでさまざまな食材が容易に手に入るようになったりしたことで、次第に行われなくなり、現在では全く行われていない。

現在の山の利用としては、一部の家がシイタケ栽培のためにホダ木を伐り出しているのみである。

## 5 1950年代から現在(2007年)への変化

1950年代と現在(2007年)の里地里山の利用状態を、空間的な利用形態と時間的な利用形態の面から比較してみると、農業形態の変化と里山利用の減少が、大きな変化としてあげられる。

### (1) 農業形態の変化

1950年代では農業は重要な現金収入源であり、中でも稲作は日々の生活を左右する特に重要な仕事であった。少しでも多くの良いお米を収穫するために、草取りや肥料やり、水の調整などを、その年の稲の成長具合に合わせて行い、一日も休む暇は無かったという。また、当時の仕事はほとんどが手作業であり、辛い姿勢での田植えや真夏の草取りなど、体力を消耗する仕事が多かった。そのために、工夫した道具や方法がある。例えば田植え時には、結(ゆい)と呼ばれる助け合いのグループを近所の人たちや友達同士で作って、お互い助け合いながら田植えをした。また、作業をしながら歌う仕事歌も、苦しい仕事から気を紛らわせ、能率を上げるための工夫でもあった。

現在の里では、農業を営んでいる全ての家が兼業農家になり、集落営農をするようになった。1950年代以降、農業の機械化が進み、機械の購入費と維持費がかかるようになり、さらに米の価格が下がったために、各家での営農では採算が取れなくなった。そ

ここで、集落のタンボをひとつにまとめて集落営農の組合を作り、機械に対するコストを削減した。さらに圃場整備で効率がよくなったが、現代の生活に見合うような利益には到底ならないという。タンボでは減反政策のため、稲作ができないタンボを使って稲作と平行して大豆を作るようになったが、これも減反分の損益は埋められないという。少しでも利益を増やすために、大麦の種子生産を裏作で作るようになった。

機械化によって、仕事にかかる時間と手間は大幅に削減されたが、結（ゆい）のような助け合いはなくなり、仕事歌も歌うことはなくなった。

## (2) 里地里山利用の減少

1950年代は、冬の間の“山行き”やキノコ採り、シイタケ栽培やシメジ栽培、アゼクサの利用は、日々の生活の中で欠かせないものであった。しかし、このような営みは、現在の堂ではほとんど見られない。

この変化の主な要因は燃料革命であると考えられる。1950年代後半から、薪炭材の代わりに石油・ガスなどの化石燃料が普及し始め、農業においても化学肥料や農薬が頻繁に利用されるようになった。それに伴って里地里山は利用価値を失っていったのである。堂でも、持ち山を手放したり、山を放置したりといった状態になっている。

## 6. おわりに

今回の研究では、大津市堂の里地里山利用を、聞き取り調査によって取りまとめ、1950年代から現在（2007年）の約60年の変化を明らかにした。里地里山の利用を含めた人と自然の関わり合いの変化は急速で、自然との関わり合いが断絶する中で、その地域性が失われているように思われる。自然とのふれあいが重視される今日（環境省2002）、自然との関わり合いを再構築することが重要になってきた。里地里山の景観はそこに暮らす人々の生活そのものであった。生活様式が大きく変わった現在、どのような里地里山利用を図るのか、自然との関わり方をどのように整えていくか、考えていく必要がある。そのための基盤として、今回のような里地里山の歴史や特徴を知る作業は、重要であると考えられる。その土地に合った持続的な利用方法こそが、これから先に求められている新しい里地里山の形を作っていくと思われる。

## 謝辞

調査にご協力いただいた南部絹枝様、前田藤美様、谷本眞澄様、南部正敏様、南部義彦様に厚く御礼申し上げます。また、この研究のきっかけを与えてくださった今北哲也様（杣の会）と吉野奈保子様（共存の森ネットワーク事務局）にも厚く御礼申し上げます。

## 引用文献

- 上田上村誕生百周年記念事業実行委員会（1990）上田上の生活体験談集成，上田上村誕生百周年記念事業実行委員会，大津
- 環境省（2002）新・生物多様性国家戦略～自然の保全と再生のための基本計画～，ぎょうせい，東京
- 南大萱史編さん委員会（2004）南大萱史，南大萱史編さん委員会，大津
- 南昌宏（2008）龍谷の森におけるコナラ二次林の二酸化炭素収支，龍谷大学理工学部環境ソリューション工学科卒業論文
- 瀬田東学区郷土誌会編集委員会（1998）昔を今、語りつぐわがまち瀬田東，瀬田東学区郷土誌会，大津
- 杣の会（1990）雑木山生活誌資料 朽木村針畑谷の記録 1988～1990，特定非営利活動法人 杣の会，朽木
- 田村博（1972）田上の民俗：村組織・年中行事・太鼓踊り・石造美術，民俗文化研究会，大津
- 月輪栗林史編纂委員会（1981）月輪栗林史，月輪栗林史編纂委員会，大津
- 月輪史編纂委員会（2006）月輪史，月輪史編纂委員会，大津